

ハマル語の数量・程度表現についての覚え書き*

高橋 洋成

(Tel Aviv University)

tjonah@khh.biglobe.ne.jp

1 はじめに

本稿で記述するハマル語は、エチオピア南西部の低地オモ溪谷で使用されているオモ系言語の1つである。Ethnologue のデータによれば¹、近縁のバナナ語と合わせ、1994年の国勢調査で42,800人の話者が確認されている。ハマル語の中心的話者であるハマル族の人々は、南部諸民族州 (Southern Nations, Nationalities, and People's Region) における南オモ県の県都ジンカから南に約60kmに位置するディメカ、および約130kmに位置するトゥルミを中心に生活している。近年は交通網が整備されつつあり、学校教育を受けるためにジンカへ通学する若者が増えている。ジンカは海拔1,500mと比較的高地であるが、トゥルミは900mとやや低い。

筆者は2006年からハマル語の現地調査を行い、言語データの収集を行っている。調査に協力して下さったBazo Morfa氏 (ディメカ出身、ハマル族)、Mulken Gulelat氏 (トゥルミ出身、アムハラ族)、Shoma Dore氏 (ディメカ出身、カロ族)、Bodo Kala氏 (トゥルミ出身、ハマル族) に、この場を借りて感謝を申し上げます。

ハマル語の包括的な記述文法にはLydall (1976) による46ページの論文があり、筆者の現地調査もこの論文が提供する形態論と統語論をもとに行われている。これまで筆者が収集した言語データを踏まえ、本稿はハマル語における数量表現と程度表現について、語形や構文を分類・整理することを目指す²。

*本調査は平成22~25年度科学研究費基盤研究(B)「変容するエチオピア諸言語の静態と動態に関する総合的研究、ならびにデータベース構築」代表：柘植洋一 (金沢大学) (課題番号22401046) によるものである。

¹http://www.ethnologue.com/show_language.asp?code=amf

²本稿の例文解釈で用いる記号は次の通り。ハイフンは形態素 (あるいは形態素に含まれる意味成分) 区切り、等号は接語区切り。A = 名詞の a-form、ACC = 対格標識、COPULA = コピュラ、IMPFV = 動詞未完了、IMPV = 動詞命令、NA = 名詞の na-form、NO = 名詞の no-form、NOT = 否定、PFV = 動詞完了、PL = 複数、PTC = 分詞、PURP = 動詞意志、STAT = 動詞状態、SUBJ = 従属節主語。

2 ハマル語名詞類の概要

2.1 音素目録

本稿では、ハマル語に次の音素を立てる。

p, b, b̥, m, t, d, d̥, n, k, g, g̥, ŋ, ʔ; s, z, š[ʃ], č [tʃ], ʃ [dʒ], h [ɦ]; t', č' [tʃ̣], q'; r, l, w, j; i, e, a, o, u; i:, e:, a:, o:, u:

ハマル語に特徴的な音は入破音 /b, d, g/ と放出音 /t', č', q'/ である。調音上無気である入破音に対し、/p, t, k/ は強い有気音であり、ほぼ自由に摩擦音と交替する³。また、/h/ は有声の [ɦ] であるが、本稿では読みやすさのためにこの記号を当てる。

母音は長短を区別する。/e/ は非常に狭く、/i/ はしばしば中央化する。/o, u/ は強い円唇性を持つ。

ハマル語の名詞アクセントは語彙的であり、本稿では必要に応じて á のように示す。動詞のアクセントは形態的に決まり、予測可能である。

2.2 名詞の語形変化

ハマル語の名詞は、原則として文法的性や文法的数を問わずに用いることができる。例えば、/zóbo/ 「ライオン」はオス・メス、単数・複数に関係なく使用できる。だが、そうした情報の区別が必要になった場合には、次に挙げる3つの接尾辞を用いる。

接尾辞 -ta は「男性（オス）であること」「一つだけであること」「小さいこと」を表す。どれを意味するかは文脈にもとづいて判断する。この接尾辞は /hajta/ 「太陽」のようにやや固定化された表現に多く、日常的に用いられる場面は多くない。

接尾辞 -no は「女性（メス）であること」「たくさんあること」「大きいこと」を表し、-no は日常的に用いられる。/zóbono/ は「多数のライオン」あるいは「メスライオン」を意味し、どちらであるかは文脈から判断する。ここでの「多数」とは「大きな集団、大きなかたまり」という量的多数を意味し、/noq'o/ 「水」のような不可算名詞であっても /noq'ono/ 「大量の水」を作ることができる。

接尾辞 -na は明確に数えられる可算的複数を表す。/zóbona/ は単独で「2、3匹のライオン」を意味するが、数量表現を伴うことで多寡を調節できる。

以上の3つの接尾辞を伴う名詞形を、Lydall (1976: 406-409) にしたがって、それぞれ a-form、no-form、na-form と呼称する。また、接尾辞を伴わない名詞形を

³摩擦音化した異音を /p, t, k/ と表記する

基本形 (basic-form) と呼ぶ。

meaning	basic-form	a-form	no-form	na-form
“guest”	ašín	ašinta	ašínno	ašínna
“sorghum”	isín	isinta	isínno	isínna
“baboon”	gaja	gajta	gajtono, gajan(o)	gajana
“flower”	ha:q'a	hatta	ha:q'an(o)	ha:q'ana
“lion”	zóbo	zóba	zóbono	zóbona
“water”	noq'o	noq'a	noq'on(o)	noq'ona
“goat”	q'uli	q'ulta	q'ullo, q'ultono	q'ulla
“stone”	se:ni	se:nta	se:nno	se:nna

基本形が -o で終わる名詞の a-form では、接尾辞 -ta が -a になる。基本形が -a/i で終わる名詞では、しばしば no-form において接尾辞 -tono を用いる。また、no-form に後続する要素があるとき、末尾の -o が脱落して -n だけになることも多い。

2.3 名詞と形容詞の文法的一致

ハマル語において名詞の文法的数、性の標示は義務的ではない。だが、形容詞が名詞を修飾するとき、接尾辞を名詞に一致させることは義務的である。以下に挙げるのは gari 「大きい」を伴う例である。

se:ni gari	“big stone(s)”
se:nno ga:rro	“huge stone(s)”
se:nna ga:rri	“some big stones”

指示代名詞も、語形を名詞と一致させなければならない。名詞の基本形に対応する指示代名詞には a-form が用いられる。

se:ni ka	“this stone”
se:nno koro	“this/these stone(s)”
se:nna kira	“these stones”

しかし、形容詞が名詞を修飾するのではなく、述語として用いられる場合には文法的一致が義務的ではない。一致しても、しなくても良い。

se:nno ga:ri=ne	“The stone is huge.”
se:nno ga:rro=ne	“The stone is huge.”

3 数量表現

3.1 名詞接尾辞による数量表現

2.2 節で述べたように、ハマル語の名詞複数形には量的多数を表す no-form と、可算複数を表す na-form の 2 種類が存在する。実体として数えられない /noq'o/ 「水」であっても、/noq'ono/ と /noq'ona/ の両方を作ることができる。

- (1) noq'o **ka** ina ima.
water this-A to me give-IMPV
“Give me this water.”
- (2) noq'**ono** **koro** ina ima.
water-NO this-NO to me give-IMPV
“Give me this mass of water.”
- (3) noq'**ona** **kira** ina ima.
water-NA this-NA to me give-IMPV
“Give me these cups of water.”

上記例において、(2) の noq'ono は「大きな水、大量の水」を意味し、別の語 baz 「大きな水たまり、湖」に置き換え可能である。(3) の noq'ona は水が具体的に数えられる形になっていること、例えば、数杯のコップに入っていることを含意する⁴。

3.2 数量名詞

いくつかの名詞は量を表す数量名詞として用いられる。

/bisi/ は「体」を意味するが、「全体」を意味する名詞としても用いられる。また、「枝」を意味する /anti/ も「部分、残り」を意味する名詞として用いることができる。

- (4) aga **bisi**=ne.
this body=COPULA
“That’s all.”
- (5) aga **anti**=ne.
this body=COPULA
“This is a residue.”

このとき、何の「全体」もしくは「残り」であるかを後接語の /sa/ を用いて限定することができる。/sa/ を伴い数量名詞を限定する名詞には、しばしば no-form が用いられる。一方、限定される数量名詞は基本形、no-form、na-form の

⁴あるいは、数本の水路や、数個の水たまりなど。

いずれであっても良い。次に挙げるのは、/e:di/「人」の no-form である /en(o)/「人々」によって /anti/「残り」を限定する例である。

e:n=sa anti “rest of the people”

e:n=sa antino “rest of the people”

e:n=sa antina “rest of the people”

また、形容詞を数量名詞化して用いることがある。形容詞から派生した数量名詞は、no-form の形で用いられることが多い。次に挙げるのは /gebi/「大きい」を、「ほとんど」を意味する数量名詞 **gembo** として用いる例である。

(6) e:no=sa gembo ni?a=de.
 person-NO=of large-NO come-PFV=being
 “Most of the people has come.”

(7) inta noq'on=sa gembo wučidi=ne.
 I water-NO=of large-NO drink-STAT-is=COPULA
 “I drank most of the water.”

3.3 形容詞による数量表現

形容詞が、名詞の数量を表す場合がある。なお、2.3 節で述べたように、名詞を修飾する形容詞は語形を名詞に一致させるが、述語として用いるときは必ずしも語形を一致させない。

「小さい」を意味する /likka/ は、修飾する名詞の意味や語形によって「少量の」の意味にもなる。例えば、/noq'o/「水」の基本形が /likka/ を伴えば「少量の水」であるが、na-form を用いると「いくつかの小さな水」の意味になる。

noq'o likka “small amount of water”

noq'ana likkana “some small puddles”

こうした曖昧さを避け、「少量の」の意味を明示したいときは量的多数を示す no-form を用いれば良い。以下の例 (8) と (9) はほぼ同じ意味に用いることができるが、後者は「少量の」の意味であることが明確である。

(8) jer kote likka sija da:=ne.
 thing here small bad exist=COPULA
 “Here is a small problem. / Here are some problems.”

(9) jerro kote likkano sijono da:=ne.
 thing-NO here small-NO bad-NO exist=COPULA
 “Here are some problems.”

同じように、「大きい」を意味する /gefi/ を「多量の、十分な」の意味として用いることができる。そもそも名詞の no-form には「多量の」が含意されているが、形容詞 /gefi/ を伴うことで量的多数の意味であることを明確にできる。また、可算複数を示す na-form に付随する場合は「多数」の意味になる。

noq'o gefi "large amount of water"

noq'ono gembo "large amount of water"

ha:q'a gefi "a big tree"

ha:q'ano gembo "large amount of trees"

ha:q'ana gemba "many trees"

ところで、形容詞を述語として用いる場合、通常は語形を名詞に一致させる必要はない。

- (10) e:no katti gefi=ne.
 person-NO very large=COPULA
 "There are countless people."

形容詞が名詞を修飾する場合は、語形を一致させる必要がある。ところが、/likka/ や /gefi/ に関しては、名詞を修飾する場合であっても語形を一致させないことも多い。例 (11) では、/gefi/ が語形変化を持たない副詞または数量詞として派生したと考えられる⁵。

- (11) šeda! e:no gefi na?a=te ko da:=de.
 look-IMPV person-NO large come-PFV=in they exist=being
 "Look! A lot of people are coming."

さて、ここまで no-form を量的多数として扱ってきたが、no-form には女性の意味もある。意味の曖昧さを避けるため、量的多数の場合と女性の場合とで、形容詞自体を使い分けることがある。次に挙げる例では、/zóbono/ 「メスライオン」に対する形容詞として /gefi/ ではなく /gari/ 「大きい」を使っている。

zóbono garino "a big she-lion"

3.4 数量詞

数量詞は、名詞を修飾するという点で形容詞と同じ機能を持つが、語形変化を持たないという点で形容詞とは一線を画す。通常は名詞および代名詞の後ろに置かれる。

以下に /wul/ 「全て」を用いる例を挙げる⁶。/wul/ は no-form や na-form を持

⁵例 (11) において、動詞完了形に後接語 te 「～の中で」を付けて動名詞的に用いる用法については、Lydall (1976: 423) を参照。

⁶これらの例は、程度を表す副詞として解釈することも可能である。

たず、常に基本形のまま用いられる。発話時の小休止は、たいてい /wul/ の後に置かれる。

- (12) e:no wul anča=te ko da:=de.
person-NO all laugh-PFV=in they exist=being
“All the people are laughing.”

- (13) ha:q'ano koro wul pajja=ne.
tree-NO this-NO all good=COPULA
“All the trees are good.”

数量詞 /wani/ は「いくつかの、何人かの」の意味として用いられる⁷。以下に示すように、修飾する名詞に語形を一致させることはない。

- (14) e:no wani anča=te ko da:=de.
person-NO some laugh-PFV=in they exist=being
“Some people are laughing.”

数量詞は、名詞の基本形、no-form、na-form の全てを修飾することができる⁸。次に挙げる 3 例は、ほぼ同じ意味である。

- (15) ha:q'a wani pajja=ne.
tree some good=COPULA
“Some trees are good.”

- (16) ha:q'ano wani pajja=ne.
tree-NO some good=COPULA
“Some trees are good.”

- (17) ha:q'ana wani pajja=ne.
tree-NA some good=COPULA
“Some trees are good.”

数量詞 /pač'i/ 「たくさん」は量的多数にも可算複数にも用いることができるが、日常的には量的多数を表す no-form を修飾することが多い。

- (18) metén innón=te q'asano pač'i=ne.
head-NO my-NO=in louse-NO much=COPULA
“There are a lot of lice on my head.”

形容詞である /likka/ 「小さい」は、しばしば数量詞化して用いられ、語形の一一致を省略する⁹。

⁷ 「別の」を意味する形容詞 wa: から派生したと思われる。

⁸ 日常的には no-form の頻度が高いように思われる。

⁹ あるいは、程度の副詞として解釈することも可能である。

- (19) noq'ono **likka** da:=ne.
 water-NO small exist=COPULA
 “There is a small cup of water.”

3.5 数詞

数詞も数量詞の一種と考えられる。no-form や na-form を持たず、修飾する名詞に語形を一致させる必要がない。日常的には、名詞の基本形の後ろに数詞を置く場合が多い。

- (20) ha:q'a **lama** ina ima.
 tree two to me give-IMPV
 “Give me two trees.”

- (21) ha:q'a **tafi lama** ina ima.
 tree ten two to me give-IMPV
 “Give me twelve trees.”

だが、数詞の語順は固定化されたものではない。数詞を名詞の na-form と一緒に用いたり、名詞の前に置くことも可能である。

- (22) **lama** ha:q'a ina ima.
 two tree to me give-IMPV
 “Give me two trees.”

- (23) ha:q'**ana lama** ina ima.
 tree-NA two to me give-IMPV
 “Give me two trees.”

なお、名詞の no-form を数詞と一緒に用いた場合、その no-form は量的多数よりも女性を表すことが多い。特に有生名詞の場合はその傾向が顕著である。

- (24) q'ulino **lama** ina ima.
 goat-NO two to me give-IMPV
 “Give me two she-goats.”

4 限定表現

4.1 名詞接尾辞による限定表現

ハマル語に冠詞はない。特定のものを指し示す場合には、形容詞や指示代名詞などを用いて表現する。

名詞の a-form を用いれば唯一のものであることを示すことができる。ただし、2.2 節で述べたように、この用法が日常的に使われることは少ない¹⁰。

¹⁰a-form を有生名詞の男性形として使うことは多い。

- (25) *hatta ka ina ima.*
 tree-A this-A to me give-IMPV
 “Give me this very tree.”

限定を表すには、a-form よりも no-form を利用する機会が多いように思われる。以下に例 (18) を再掲するが、/metén(o) innó/ 「私の頭」に着目したい。

- (18) *metén innón=te q'asano pač'i=ne.*
 head-NO my-NO=in louse-NO much=COPULA
 “There are a lot of lice at my head.”

この例における /metén(o) innó/ は量的多数ではなく、もちろん女性でもない。この no-form は「大きいこと」を示すものと思われる (2.2 節を参照)。ここで no-form を使う理由として、2つの可能性が考えられよう。

- 「私の」を意味する a-form の /inčea/ 「私の」では後接語 /te/ 「～に、～で」にかかりにくく、発音補助のために挿入される /n/ が no-form の /inno/ を誘発し、語調を整えるため。
- 「大きいこと」を意味する no-form が、名詞を限定を含意するため。

ここでは後者の理由、すなわち、no-form が名詞の限定機能を持つ可能性について指摘しておきたい。名詞が後接語を伴う場合、全てではないが、no-form を用いることが多い。以下に、「私は水を飲む」を意味する 4 種類の文を例示する¹¹。

- (26) *inta noq'o wučidi=ne*
 I water drink-STAT=COPULA
 “I drank water.”
- (27) *inta noq'o=**dan** wučidi=ne*
 I water=ACC drink-STAT=COPULA
 “I drank water.”
- (28) *inta noq'on=**dan** wučidi=ne*
 I water-NO=ACC drink-STAT=COPULA
 “I drank (the) water.”
- (29) *inta noq'on wučidi=ne*
 I water-NO drink-STAT=COPULA
 “I drank (the) water.”

¹¹後接語 /dan/ は目的語を明示するのに用いられるが、しばしば省略される。

ここに挙げた例 (26) から (29) までは、全てハマル語の文として適格である。この中で、比較的よく用いられるのは (29) である。(29) では /noq'o/ 「水」の no-form を用いているが、決して大量の水を飲んでいるわけではない。目の前にあるコップの水を飲んでいるときに用いられる文である。

もちろん、例 (26) や例 (27) でも「目の前の水」を飲んでいることが、話し手と聞き手の属する文脈から明らかである。しかし、例 (28) や例 (29) のように no-form を用いる目的は、この語形が含意する「大きいこと」の意味を利用して、「私」が飲んでいる「水」が、他にもない、目の前にある「この水」だということを強調することにある。つまり、no-form には名詞を限定する機能があるのではないか。この点については稿を改めて論じることにし、本稿では可能性を指摘するにとどめる。

4.2 数量詞による限定表現

特定のものを表現するときに、しばしば数詞が利用される。

「両方」を示すときは /lama/ 「2」を名詞として使い、/lama wul/ 「2 個全て」という句を作る。数詞は no-form や na-form を持たないため、基本形のまま用いられる。

- (30) **lama wul imbétte pajja=ne.**
two all with me good=COPULA
“Both are OK to me.”

- (31) **wosi lama wul sa: jo?o=da je?e.**
we two all there go (we)=exist go-IMPFV
“Both you and I must go there.”

「どちらか 1 つ」を示すときは、後接語の /be/ によって候補となるものを列挙し、後接語の /sa/ に続けて /kala/ 「1」を用いる。「どちらも～ない」の意味の文を作るときも同じ句を使える。

- (32) **hambe imbe=sa e:di kala sa: ja?a ki je?e.**
you=and I=and=of person one there go he go-IMPFV
“Either you or I must go there.”

- (33) **hambe imbe=sa e:di kala sa: je?e.**
you=and I=and=of person one there go-IMPFV-NOT
“Neither you nor I have to go there.”

「全てのもの」を表す場合は /wul/ を名詞として用いることができるが、no-form や na-form を持たない。

- (34) kisi wul zaga ki zage
 he all want he want-IMPV
 “He wants everything.”

「1つも～ない」を表現するときも /kala/ 「1」を用いることができる。このとき、動詞の主語要素の有無によって意味が変わりうることに注意が必要である。次に挙げる例 (35) には主語要素がなく、文脈で動作主が判断される。この場合、/jer kala/ が強く結合し、動詞の否定形と相まって「1つも～ない」という意味になる。一方、主語要素を持つ (35) では、/jer kala/ が「ある1つのもの」のように分析的に解釈される。

- (35) jer kala isée.
 thing one eat-IMPV-NOT
 “(He) cannot eat anything.”

- (36) jer kala ki isée.
 thing one he eat-IMPV-NOT
 “He cannot eat one thing.”

4.3 後接語による限定表現

ハマル語の統語論では後接語が非常に重要な位置を占める。後接語は句や節を作るのにも用いられるが、本節では特に限定を表す後接語について述べる。

「同じ」であることを示すには、後接語の /disi/ 「～のような」を用いる。次の例では、/jerra han zaga/ 「あなたの欲しいもの」の後に /disi/ が置かれ、どのような「もの」であるかを具体化している。

- (37) inta jerra han zaga disi i=da zage.
 I thing-NA you-SUBJ want like I=exist want-IMPV
 “I want the same thing as you ordered.”

次の例では、/disi/ が /ka(:)/ 「これ」の後ろに置かれ、さらに人称代名詞 /ko/ が抽象的な「このようなもの」を指していると考えられる。

- (38) isa ka: disi ko=de zaga i=da zage.
 my this-A like she=being want I=exist want-IMPV
 “I want the same one as this.”

/q'orma/ は「～なしで、～以外」を意味する語である。次の例では、まず /gala wul/ 「全ての食べ物」を挙げ、次に除外する /kumbala/ 「スープ」を置く。日常的にはこの語順が一般的である。

- (39) *inta gala wul=ɖan kumbala q'orma isidi=ne.*
 I food all=ACC soup without eat-STAT=COPULA
 “I eat any food without soup.”

関連して、/q'ole/ は述語的に「ない」を示すコピュラである。数詞を伴い意味を強調することもある。

- (40) *tamari kala q'ole aqa=ɖan aške.*
 pupil one there is no this-ACC do-IMPFV
 “No pupil could not do this.”

4.4 その他の限定表現

疑問詞の /ha:ma/ 「どれ」が名詞を限定するとき、語形を一致させることはない。

- (41) *gala ha:ma=ne han zage.*
 food which=COPULA you-SUBJ want-IMPFV
 “Which food do you want?”
- (42) *ha:ma=ne han naše ka:=be ka:=be=sa.*
 which=COPULA you-SUBJ love-IMPFV this=and this=and=of
 “Which do you like better, this or that?”

動詞 /taha/ 「似ている」の分詞形を用いて、「同じような」を意味する形容詞節を作ることができる。

- (43) *inta golgošo naša i=da naše ko tahn.*
 I woman love I=exist love-IMPFV she resemble-PURP-PTC-NO
 “I love woman like she.”

5 程度表現

5.1 副詞による程度表現

副詞は、動詞・形容詞・数詞を修飾し、語形を一致させる必要がない。

形容詞 /likka/ 「小さい」を副詞化し、数量詞を修飾することが日常的に行われる。例 (44) では /likka/ が副詞として /wa:ni/ 「いくつかの」を強調し、「ほんの少しの」の意味となる。

- (44) *e:na likka wa:ni da:=ne*
 people small some exist=COPULA
 “There are very few people.”

動詞や形容詞の意味の中に「程度」が含まれている場合、単に /katti/ 「非常に」を付け足すだけでその「程度」を強調することができる。次の例では、/goba/ 「走る」という動詞に含まれる「速さ」の程度¹²や、/q'aji/ 「冷たい」という形容詞の程度を /katti/ が強調している。

(45) kisi **katti** ki **gobe**.

he very he run-IMPFV

“He can run fast.”

(46) ina=q'a **katti** **q'aji**=ne, hana=q'a q'aji=te.

to me=for very cold=COPULA to you=for cold=COPULA-NOT

“It is too cold for me, (but) not for you.”

数量詞や形容詞を名詞化して後接語 /ka/ 「～と共に」を付けることで、比較的自由に副詞句を作ることができる。こうした派生副詞の中には固定化された表現も多い。例えば、/wa:ni/ 「他の」に後接語 /ka/ を付けた /wa:nin=ka/ は、文脈に応じて「時々」の意味を持つ。

(47) kisi **wa:nin=ka** jinka ja?a ki je?e.

he other=with Jinka go he go-IMPFV

“He sometimes goes to Jinka.”

また、動詞の分詞形が副詞として機能する場合がある。次に挙げるのは複合動詞 /lejha:ma/ 「横たわる¹³」の未完了分詞形から派生し、「ゆっくりと」の意味を獲得したものである。

(48) kisi **lejha:majse** ki dalq'e.

he lie-down-IMPFV-PTC he speak-IMPFV

“He speaks slowly.”

6 比較表現

6.1 後接辞による比較表現

ハマル語の形容詞には英語の比較級に類するようなものはない。程度を比較するときは、比較の基準を表す各種の後接語を用いる。

以下の例では、「～より、～から」の意味を持つ /ra/、/kalanka/、/gidr/、/q'an/ を用いている。また、これらに不定の概念を表す /l/ 「ある種の¹⁴」や場所を示す /t(e)/ 「～の中に」を複合して用いる場合がある。

¹² 「頻繁に走る」「よく走る」のような意味ではない。

¹³ /leji/ 「伏している」と /hama/ 「する」の複合語である。

¹⁴ /l/ が不定の概念を表すというのは Lydall (1976: 413) の解釈にもとづく。一方で、ハマル語には定の概念を表す後接語がない。ただし、4.1 節で触れたように no-form が定の概念を示す手段として用いられている可能性がある。

- (49) inta **akalanka** gudub=ne.
I you-from tall=COPULA
“I am taller than you.”
- (50) inta **akalanka=l** gudub=ne.
I you-from=INDEF tall=COPULA
“I am taller than you.”
- (51) inta ha **gidr=ra** gudub=ne.
I you from=from tall=COPULA
“I am taller than you.”
- (52) kisi ina **q’an=te** gudub=ne.
he to me from=in tall=COPULA
“He is taller than I.”

「～以上」「～以下」を意味する句も、後接辞による比較表現で作られる。例(53)では、6歳を起点にし (/lak=ra/)、それより下の (/čo:=bar/) 年齢の子どもは入れないことを意味する。

- (53) na:na leʔen=sa lak=ra čo:=bar hamma ardee.
child-NA year-NO=of six=from below-from do-IMPFV-PTC-NOT enter-IMPV-PL-NOT
“Children under six years old cannot enter.”
- (54) kisi wojsima saʔátí lama **gidr=ra** pa:ši ki dalq’a=de.
he stop-STAT-PTC-NOT hour two from-from make good-STAT he speak=exist
“He continued to speak more than two hours without stopping.”

6.2 その他の比較表現

いわゆる最上級を示したい場合、表されるものが男性であるならば、名詞の a-form で唯一性を強調できる。

- (55) kisi delin wonnon=te guduba=ne.
he house-NO our-NO=in tall-A=COPULA
“He is the tallest in our house.”
- (56) kisi delin wonnon=te gečo=ne
he house-NO our-NO=in old-A=COPULA
“He is the oldest in our house.”

最上級として表現したいものが女性である場合、特別な語形や構文はない。例(57)では、副詞の /katti/ 「非常に」や /birajse/ 「以前」を用いて主文を修飾し、特別な女性であることを強調している。

- (57) kosi **katti** n:si anza pajja=ne **birajse** in arono.
 she very child girl good=COPULA before I-SUBJ see-PURP-PTC-NO
 “She is the nicest girl which I have ever met.”

7 おわりに

本稿で述べてきたハマル語の数量表現、程度表現、比較表現について、簡単にまとめる。

- 名詞が表すものの個数や量を表現するには、数量名詞、形容詞、数量詞（数詞）を用いる。また、名詞の no-form 自体が量的多数、na-form が可算複数を含意する。
- 名詞が表すものを限定するには、指示代名詞や形容詞だけでなく、量的範囲を示す数量詞（数詞）や、類似物を示す後接語を用いることができる。
- 動詞や形容詞の意味を強調したり、程度を調節するには副詞を用いる。副詞は形容詞や動詞などから派生して作ることもできる。
- 形容詞の意味の程度を比較するには後接語を用いる。最上級の意味を表すには、名詞の a-form や副詞などを利用する。

【参照文献】

- Lydall, J. 1976 “Hamar” In M. L. Bender (ed.) *The Non-Semitic Languages of Ethiopia*. Michigan: Michigan State University. 393-438.
- 高橋洋成 2006 「ハマル語の音素とアクセント」 乾秀行（編）『オモ・クシ系少数言語の調査研究及び地理情報システムを用いたデータベース構築（Cushitic-Omotc Studies 2006）』 81-91.
- 高橋洋成 2009 「ハマル語の基礎語彙、ならびに動詞形態の考察」 乾秀行（編）『オモ・クシ系少数言語の調査研究及び地理情報システムを用いたデータベース構築（Cushitic-Omotc Studies 2008）』 107-138.
- 高橋洋成 2010 「ハマル語の代名詞と後接語体系」 乾秀行（編）『オモ・クシ系少数言語の調査研究及び地理情報システムを用いたデータベース構築（Cushitic-Omotc Studies 2009）』 131-164.
- 高橋洋成 2011 「ハマル語の文例集、および文型の分類」 乾秀行（編）『オモ・クシ系少数言語の調査研究及び地理情報システムを用いたデータベース構築（Cushitic-Omotc Studies 2010）』 111-137.